

祈り

第三十六回北九州市原爆犠牲者慰霊平和記念式典にて

山田 まゆみ

そのモニユメントの前を通るたびに、偶然のもたらす不運を想った。センサーは「しゃぼん玉」の童謡を奏でるオルゴール仕掛けになっていて、道行く人のなかには一緒に口ずさむ者もあった。

北九州市小倉北区にある北九州市立中央図書館から、万葉歌碑が並ぶ勝山公園へ抜ける側道の傍らに、そのモニユメント「長崎の鐘」は建っていた。

今年、二〇〇八年八月九日、北九州市原爆被害者の会が一九七三年から主催してきた式典に、北九州市が初の共催としての参加を決めたと、各新聞が報じた。理由は被爆者の高齢化によるもので、式典存続の運営が困難になったためとあるが、一部、市長の意向もあると伝えている。

当日、行ってみると、側道にあつたはずのモニユメントは、中央図書館の南側に移されており、周辺は広々とした芝生公園になっていた。原爆犠牲者慰霊平和記念碑前に、白いテントが張られ、関係者はすでに着席している。また、一般の参加者用と思われる受付も設けられていた。後方には、こちらにも、北九州市で初の「ながさき原爆展」の開催を知らせると思われる写真が数点、樹幹に張ったロープに展示されていた。

今年の暑さは、例年にも増して猛々しい。勝山の駐車場から徒歩で十分ほどの距離だったが、汗が噴き出た。賑やかにはしゃいでいる子ども達の雰囲気からは想像できなかったが、駐車場のエレベーターで一緒になった親子連れも、この式典の会場に訪れていた。

受付で記帳をすれば、参列者の一人になることもできたのだが、気後れを感じ、後方から式典を見守ることにした。周囲を見渡し、白いテントの後方に木陰をつくっている樺の大木、そこに居場所を定めた。私の左手には、喪服姿の年配の女性がふたり、敷物の上ひっそりと座っている。式典が始まろうとする頃、もう一組、若い夫婦連れのように見えたが、私の左手前に静かに佇んだ。

木陰とはいえ、照りつける日射は次第に激しさを増す。女性は日傘を翳して、ふくらした腰回りをかばうような仕草をした。兄弟でじゃれあっていた子どもたちは、母親の制止を待つまでもなく、肅とした面持ちで、気をつけの姿勢をしている。

午前十時四十五分から始まった式典の式次第は、遠目にも滞りなく進み、長崎原爆投下の午前十一時二分、鳴らされる鐘の音に一分間の黙祷を捧げた。いつのまにか正座をしていた喪服の女性は、合掌した両手にお数珠を手挟み、鐘の音が絶えた後もなおその姿勢を変えない。若い男女も静かに祈り続けている。

何度も、そのモニユメントの前を通りながら、一度も、父の長崎と結びつかなかったことが今更ながら不思議に思えた。長崎は父の思い出の地だったのに。

目をつむり、図書館の風景が消えた視界に浮かんできたのは、昭和十四年、父が長崎高商在学中に日記帳に書き留めた長崎駅で

あり、浦上天主堂であり、下宿先のおばさんであり、父の恩師だった。

原爆文学研究会への参会も五年が過ぎ、最近ようやく、原爆文学というジャンルについて精確に知るようになった。三十数年前に文学部に在籍した私が、文学研究は作品と評論集に埋もれて行くものだと、の先入観を払拭できたのも、ついこの頃のことである。

六月七日、活水女子大学で開催された第二十四回原爆文学研究会は、翌日に長崎市内のフィールド・ワークが予定されていた。

父の日記帳を持参していた私は、そのフィールド・ワークには参加せず、日記帳に残された地名を頼りに、単独で父の長崎を辿るつもりだった。ところが、会場で手渡された資料、平成十一年八月九日に作成されたその資料に印刷された「射的場」の文字が、どこかにつながっていることに気づいた瞬間、体中が総毛立つような身震いを感じた。半信半疑で、おそろおそろ開いた父の日記帳の頁は六月一日。

「起床午前六時半。新しい家での就寝に馴れず眠れぬ。下宿のおばさんに起こされる。浦上医大射的場にて実包射撃行わる。得点三十一点」

誤解を招くおそれがあることも承知の上で、敢えて書くのだが、私にとって、そこに記されている事柄は天恵のように思えたのだ。

「五十四年目の慰霊祭 被爆した台湾出身の医学生が最後に倒れた場所」としての「射的場入り口」。確かに、それは、悲劇の起こった場所ではあったのだが、生前の父の記憶を持たない私には、その資料の趣意とは異なる次元で切実な意味を持っていた。フィールド・ワークで一緒にした方々には申し訳ないことだった

が、私は私の個人的な思いを以て参加していた。

この射的場で防空壕を掘っているさなかに原爆が投下された。

その犠牲となった医学生に哀悼の念を寄せながらも、この同じ時日、満州の新京陸軍経理学校に応召・配属されていた父の、その後の過酷な運命を想っていたのだ。敗戦と同時に、シベリアの地に抑留された父は、幸い帰国し、家庭を築くことができたものの、その境涯は四十年に満たないものだった。

「工務係の書棚から一九四二年度校舎配置図が見つかりました。そこには射的場が描かれていました。(略)斜面の藪を払ってみたら土手と防空壕があつたのです。戦前からの医学部近辺の住人の証言で、その場所が射的場の土手だと確認できました」(資料より)

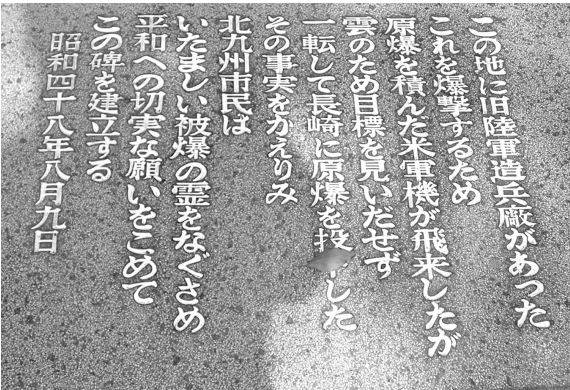
医大の裏手の丘陵の雑木林の一面に、その土手の面影を見ることができた。手前の湿地は、おそらく防空壕の設営に付随してできたものだろう。この風景もまた、記憶のどこかにつながっていた。帰宅して、父のアルバムを開く。

奥付に、「昭和十四年十二月十九日」「長崎要塞司令部検閲済」「写真館 響」と記された父の卒業アルバムに、その風景はあつたはず。どのあたりだったか。

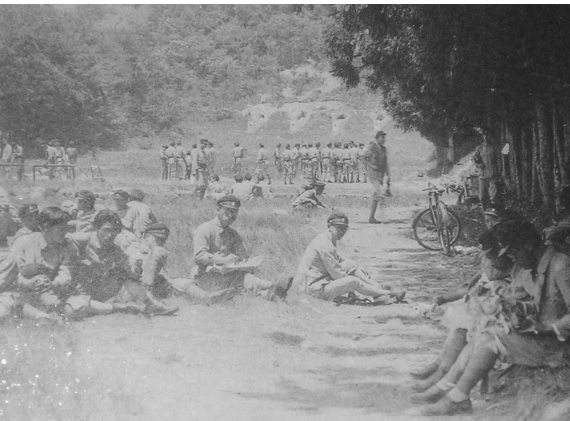
「支那事变国債 郵便局売出し 十二月十一日ヨリ同月二十二日マデ」や「大東亜長期建設」と、戦意昂揚を各所に配布されたらしい、当時の啓蒙ポスターによってレイアウトされた頁を繰っていくと、セピア色に変色した蒙古の地図上、軍馬で疾駆する大隊の写真と、砲撃の噴煙を背に配置された駆逐艦との大判写真に、「遂げよ聖戦」の目次。次ページにも時局を切り取った



〔左より 解説・慰霊碑・長崎の鐘 (北九州市)〕



〔碑文 (北九州市)〕



〔射撃場の土手 (『卒業アルバム』昭和14年12月)〕

写真が並び、それぞれに「御親閲」や「戦死者合同葬」「満蒙開拓義勇軍」と解説が施されている。次の頁は、勤労奉仕の作業に汗を流す学生。さらに頁を繰っていくと、あった。〃みりたりずむ〃の頁に、射撃場の土手を写し撮った数枚、銃を構えた学生がポーズをとっている。このなかに父がいる。父の境遇を辿ろうとすれば、避けて通れない歳月が歴史の裂け目から見えてくる。それも耐え難い記憶として。辛酸を極めるそれらの歴史と向き合わない限り、父と出会うことは不可能なのだろう。それは、おそら

く私の能力の限界を超えているに違いない。活水女子大学の服部教授がフィールド・ワークのために準備してくださった、齊藤寛著『大学の窓から―医学部百五十周年に思う』(長崎文献社 二〇〇七・一一・一二)による平成十二年七月一日の資料には、「来月九日は、第五十五回目の原爆記念日です。」と結ばれている。第六十三回目の「長崎原爆の日」、蟬時雨の降る夏の公園で、私もまた一心に祈り続けた。